身代わり地蔵

この村の人は月に一回地蔵さんの日にお参りをしているんですよね。その地蔵さんの家に後妻が来たんですよ。女の子一人おりまして、その女の子、後妻がホントにいじめていじめて、その女の子、継母にいじめられるの、やしめられるのはぁ、おっかなくて、毎日、その当時は屋根っこかかって野ざらしみたいになっておったんですよ。そいで、毎日自分の継母にいじめられるのおっかなくて、なんぼも離れておらないもんだから、毎日その地蔵さんのとこへ来て、野にある花っこを取っては、お地蔵さんのとこにあげて、土でもって団子っこ、こう作って「地蔵さん、これ団子だよ」って、小さいながらも団子あげて、小さい手で毎日拝んだそうです。通る人も「ほぉー、おめまだ、地蔵さん拝んでだなぁ」って、「おー、いいなぁ」って、通る人にも言葉をかけられて、雨の日も風の日もお地蔵さんのとこに、子供が小さな手を合わせて、花っこあげて、土の団子作って、毎日そうして拝んで、通る人も「可哀想だもんだなぁ、これなぁ。毎日継母にいじめられて、家に居れねで、雨降っても雪降ってもこさ来て、お地蔵さんおがんでるべなぁ。可哀想なもんだなぁ」って。「かぜひくなやぁ」って、通る人が子供に言葉をかけて、せば素直な子供で、「風邪ひがねぇ」って答えて、また次の日通れば、そこで拝んで。そうしてるうちにある日、その子供、お地蔵さんの前にバダァーって倒れてたもんだから、「おめどうしたった。どこわりゃぁったが」って揺り動かしてみたら、お地蔵さんのここ、ダラダラダラーっと、赤血みたいなの流れて、その子供には何のさしさわりもなく、そのお地蔵さんが身代わりになったんですよね。火箸なって今でもあるけれどねぇ。血いでね。子供のここの所が赤ぁくなってたけども、別になんーもさしさわりなく、お地蔵さんが身代わりになって、子供に火箸の跡も何にもなく、無事にそこにただ倒れたきりであったって。そいで、そこの家の継母がそこの家から出されたって。地蔵さんには今でも焼け火箸の跡ついて、お地蔵さんが身代わりになったんですね。地蔵さんはあたりの人が信仰しています。戦前まではお参りする人、たいしたもんでしたよねぇ。今も村の人、月に一回お参りしているけれども、毎月二十三日ですね。　袴田タニ（長崎・大正8年生・79歳）

〈解説〉

継母にいじめられる子どもを、地蔵さまが身代わりになって助けるという話。この話では継母が焼火箸を子どもに押しつける場面が抜けているが、文末でその場面は想定できる。継子いじめの話は各地に残るが、変形して伝承されたものであろう。『伝承文芸』に、長崎と近接している河戸川での話があるが、子どもが地蔵さんに花や団子を供えたり、毎日拝みに行くという行為は示されていない。河戸川の話が多少子どもを美化している嫌いがある。

『能代の昔ばなし』にも同じ話がある。そこでは子どもが男の子であり、最後は継母が自分の非を悟って家族が仲良く暮らすことになる。

この二つの「身代わり地蔵」は語り伝えられる間に話者の創作が入り、

さまざまに変形していった。現在、長崎団地(字田子向)の東南端にある二十三番観音堂に身代わり地蔵の石像が安置され、四月二十三日には付近のお婆さんたちが念仏講を催している。付近の町村からもお参りに来るという。身代わり地蔵の顔面に焼け火箸の跡という黒ずんだ傷があり、数年前まではそこから浸み出る水があったという。